

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、2月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（2月）

令和 4 年 1 月 31 日
愛 媛 県

- 1 気象予報（高松地方气象台）
1 か月予報 1 月 27 日発表（1 月 29 日～2 月 28 日）

< 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 40 並 30 高 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 40 多 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 40 多 30% ほぼ平年並の見込み

< 予報のポイント >

向こう 1 か月の気温は、ほぼ平年並の見込みですが、2 週目は寒気の影響を受けやすいため、平年並か低いでしょう。

- 2 病害虫の発生予想
キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生注意

イ 予報の根拠

(ア) 1 月の定点調査におけるヘイワードの枝幹部調査では、樹液の漏出は未確認である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、樹液漏出時期は平年並とみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地見廻りにより本病による樹液の漏出の早期発見と病徴部の早期除去を行う。伐採基準は、平成 31 年 3 月改訂の「キウイフルーツかいよう病 Psa3 型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。なお、今後は発病時期を迎えることから発生に注意する。

(イ) 園地の防風対策を強化する。

(ウ) 剪定後及び発芽前までに IC ボルドー66D 50 倍等を散布する。特に、剪定による枝・幹の切り口等からの傷口感染を防止するため、剪定後の薬剤散布を徹底する。

野 菜

- (1) 黄化えそ病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 1 月中旬の調査では、3 圃場のうち 1 圃場で発生を確認している。

(イ) 媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生は未確認である。

(ウ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマは現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は直ちに抜き取り適正に処分する。

(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では発生に応じて 2～3 回防除する。

(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(2) ベと病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、3圃場のうち2圃場発生しており、やや多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 換気を行い、ハウス内の除湿に努める。

(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ウ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。

(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬剤が葉裏の菌叢に十分かかるよう丁寧に散布する。

(3) うどんこ病（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、葉および果実の発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 伝染源となる発病葉、発病果や古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。

(イ) 果実発病が中心となるため、発病初期の防除に重点を置く。

(ウ) 薬剤散布に当たっては、展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に薬剤が付着するように丁寧に散布する。

(エ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(4) 灰色かび病（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 天気の良い日は、換気を行い、ハウス内の除湿に努める。

(イ) 過繁茂や軟弱な成育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

(ウ) 発病果や枯死茎葉は伝染源となるため早めに除去する。

(エ) 発病初期の防除に努める。同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(5) 白色疫病（たまねぎ）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の早どり栽培を対象に広域調査を行った結果、発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察を十分行い早期発見に努める。特に、毎年発生している圃場では注意する。

(イ) 排水不良の圃場で発生が多いため、降雨後の排水に努める。

(ウ) 発病葉や枯死した葉は感染源となるので、適切に処分する。

(エ) 本病原菌は水媒伝染するため降雨前後の防除が重要となる。

- (オ) 発病初期の防除に努め、薬剤は同一系統の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。
- (カ) たまねぎの葉は薬剤の付着性が悪いため、展着剤を加用し丁寧に散布する。

(6) ハダニ類 (冬春いちご)

令和3年10月29日付け 病害虫発生予察注意報 (第5号) 参照

ア 予報の内容 発生量：多

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、発生は多である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察して早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。また、同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含め、ローテーション使用を心掛ける。

(イ) 天敵導入圃場では薬剤の選択に留意する。

(7) アブラムシ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、発生はやや多である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 圃場観察して早期発見に努め、発生が認められたら早めに防除する。

(イ) 天敵を放飼している圃場では、天敵に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。

(8) アザミウマ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、発生は並である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発生が認められたら早めに防除する。

(イ) 雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(ウ) ハウス開口部に防虫ネットを被覆し、成虫の侵入抑制を図る。

(9) コナジラミ類 (冬春トマト)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、5圃場のうち2圃場でタバココナジラミの発生が認められ、並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 薬剤が葉裏までかかるよう丁寧に薬剤散布を行う。

(イ) 薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。

(ウ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルスを媒介するので発生に注意する。

(10) 菌核病（春キャベツ）

ア 予報の内容 発生量：多

イ 予報の根拠

(ア) 1月中旬の調査では、4圃場のうち1圃場で発生が認められており、多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともに平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 排水を心掛ける

(イ) 発病株は早期に発見し、菌核ができなうちに早めに除去する。

(ウ) 発病後は急速にまん延するので発病前～発生初期の防除を心掛ける。

【病害虫発生予察情報】

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所
ホームページアドレスは

<http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。

◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、
使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。

◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテー
ション使用を心掛けましょう。

◎農薬の使用にあたっては、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策
を徹底しましょう。

◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵
守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。